

グローバル化を考える

先進的なまちづくりを進める都市として、世界中から注目を集める「ポートランド」。アメリカのオレゴン州北西部にあるこの街を、皆さんはご存じですか。コンパクトな都市形態を目指す取り組みや、住民主体のまちづくり等が長年にわたって行われています。

今回は、ポートランドのまちづくりについて、京都府立大学公共政策学部教授 川勝健志氏にご寄稿いただきました。

ポートランドのまちづくりに学ぶ



京都府立大学公共政策学部 教授 川勝 健志

1 いまなぜポートランドなのか

ポートランドはアメリカ西海岸のオレゴン州北西部に位置し、人口は州最大の約65万人だが、日本でもよく知られているシアトルやサンフランシスコほどの大都市ではなく、中規模のいわば地方都市である。そんな地方都市に近年、多くの人々が移住し、人口が年々増加している。興味深いのは、移住してくる人たちの多くが、比較的高学歴の若者であるということだ。なぜ彼らはポートランドにやって来るのか。

日本人の感覚からするとやや奇異な感じがするが、ポートランドにやってくる若者は、仕事を見つけてから移住するのではなく、移住してから仕事を探すことが少なくない。彼らがポートランドに移住する主たる動機は、仕事よりもまずポートランドのライフスタイルを享受したいという思いがあるからである。緑豊かなまちに立ち並ぶレストラン脇のテラス席でまだ明るい時間から地ビールや地元ワインを片手にくつろぐ人々、コーヒー豆の焙煎や有機栽培にこだわったカフェでコーヒーを楽しむ人々、ファーマーズ・マーケットで旬の農産物や手づくりのパン、スイーツを前に店主からこだわりを聞きながら味見をする買い物客などは、どれもポートランドを象徴する光景である。

まちの中心部から車で1時間半ほど走れば美しい山や海にアクセスできることや、他の大都市に比べて生活費が安いこともさることながら、やや風変わりでもユニークな考えを持った人に寛容であることもポートランドの魅力の1つである。日本では雇用を創出するため

に、域外から企業を誘致することがよくあるが、ポートランドではまず前述のようなライフスタイルを求めてクリエイティブな人たちが集まり、そこに良質の労働市場が生まれ、有能な人材を求めて企業が後からやってくる。ポートランドには、多様なイノベーションの機会があるといわれるゆえんである。

今日ほどの人気ぶりが当初から見込まれていたわけではないが、ポートランドでは将来の人口増加とそれに伴う無秩序なスプロール化を抑制するために、70年代末からコンパクトな都市形態を目指す取り組みが行われてきた。州政府が都市圏内を取り囲むように「都市成長境界線 (UGB)」を設け、都市開発はその内部に限定し、農地や自然の保全するというものである。これによって農家は安心して農業を営み、都市部で暮らす人々に産地直送で旬の農産物を届けることができる。日本のコンパクトシティの取り組みには、まったくと言ってよいほど見当たらない視点である。

また、日本では都市機能をまちの中心部に集め、周辺部に住む人たちを中心部に誘導しようとしているのに対して、ポートランドでは周辺部に暮らす人たちが中心部に集約された都市機能にアクセスできるように公共交通を整備しようとしている点でも異なる (川勝2011)。都市圏内にはバスや路面電車を中心に公共交通のネットワークが整備され、高齢者や体の不自由な住民にはLIFTと呼ばれるドア・トゥ・ドアの交通サービスもある。トランジットセンターや路面電車の駅には24時間無料の駐車場や自転車専用ロッカーが設置され、公共交通のない区域からの乗換えも可能